

ホイジンガと現代

栗原福也

新入生の諸君は苦しい受験勉強から解放され、自己の理想や好みに合った学問を学ぼうとする意欲に燃えていることでしょう。二年以上の諸君はすでにみずから選んだ学問の世界に知的好奇心を刺戟され、あるいは新しい発見の喜びにひたり、あるいは思いがけない壁に突き当たったり、卒論のテーマに思い悩んだりしていることでしょう。これからお話しするホイジンガも若い日の長い精神的彷徨の末にようやく歴史家としての自覚に到達しました。その経験は晩年に執筆された『わが歴史への道』（坂井直芳訳、筑摩叢書）によって知ることができます。本日私に与えられたテーマは「ホイジンガと現代」ですが、本題に入る前に、新しく学問を始められる諸君にとってなにがしかの示唆を与えるであろうことを念じつつ、彼の青年時代の生き方と学問的関心のありようについて述べたいと思います。

ヨハン・ホイジンガは一八七二年にオランダ北東部の都市フローニンゲンで生まれ、一九四五年に逝去しました。死後その著作は全集九巻に収められ、昨年十二月には母校フローニンゲン大学と長年にわたって学長を勤めたレイデン大学で、オランダ国内、国外の歴史学者たちによって、生誕百年を記念する連続講演会が催されました。

少年の頃から歴史に興味を持ち、紋章学や古銭の蒐集に熱中したホイジンガは、やがて、ギムナジウム（中学・高校）におけるラテン語、ギリシヤ語の学習を契機として言語に強い関心を示し、ヘブライ語、アラビア語などを進めつぎにマスターしました。彼の関心は言語から民族学や比較神話学にまで広がりました。フローニンゲン大学へ進

んだ彼はさらにサンスクリット語を学び、印欧比較言語学の研究を志しますが、他方で、文学や芸術に耽溺し、あるいは数時間も一人で市や郊外を彷徨するロマンチックな夢想家でした。

大学院、ライプツィヒ大学留学を経て学位をえ、ハーレムの高校に奉職しながらインド学に励みましたが、研究に没頭すればする程、東洋世界はヨーロッパ人である彼にとってあまりにも遠い異国、無縁の世界に感じられ、同時に幼い日から彼をとり巻いた西欧の歴史的過去への憧憬が次第に強くなりました。そのころ、彼はブリュージュで開催された中世ネーデルラント美術展を訪れ、ファン・エイクやその弟子メムリンクの作品に感激し、彼らの芸術をよりよく理解するために、その背景であるブルゴーニュ公国の社会や文化との関連において理解したいという想念をいだきます。ブルゴーニュ公国とは中世末期、フランスの東部一帯とネーデルラントに勢力を張った強国です。

かくして、彼の内部で久しく進行していた西欧中世への憧憬はファン・エイクの芸術という具体的通路をえ、三十歳を過ぎながら、ホイジンガは言語学者から歴史家へと転向しました。彼の歴史家としての才能を見抜いた恩師の推薦によってさいわいにもフローニンゲン大学の歴史学教授の地位をえた彼は、十余年にわたる周到な準備の後に『中世の秋―十四・五世紀フランスおよびネーデルラントにおける生活形式と精神形式との研究』を書き上げました。中世末期の人びとの生の調べの明暗と多彩さとを絵巻物のようにくり広げるこの著書は十九世紀の歴史学を批判的に継承して、二十世紀の歴史学を切り拓いた劃期的な作品として欧米の読書界に多くの反響をまき起こし、文化史家ホイジンガの国際的名声は確立しました。わが国でも戦後、兼岩正夫、里見元一郎両氏（創文社、河出書房）と堀越孝一氏（中央公論社）によるすぐれた翻訳が出版され、多くの読者をえております。

このように、彼は自己の内部の声に従って遍歴を重ね、内的な要求を満たす学問を誠実に求めてついに歴史学者となりました。そうした道程における言語学や民族学、ダンテやシェークスピアへの傾倒がホイジンガ史学に実に多く

の榮養を与えていることは明らかです。晩年の傑作『ホモ・ルーデンス』（一九三八年）の萌芽はわずか十六歳の少年の日の読書体験にあつたと彼は告白しております。

彼はディレクタントと自称し、「言語学者、歴史学者の緊密なギルドには服務規定があり、規則が守られなければならないが、このようなギルドの中に私は心安さを感じたことがない」（『わが歴史への道』）と述べ、また一つの時代とか一つの国というように研究上なにか一つの特種領域を自分のために選び出したことはなく、したがって「ほんとうの歴史家というものには、私はついにならなかった」（同）と言っております。これらの言葉は彼が既成の学問に安住することなく、実に独創的で個性的な歴史学を作り上げることができた秘密を明かしていないのでしょうか。すなわち自己の内部の声に耳を傾けながら学問を求め、自分の納得のゆくまで妥協しなかったことです。当時のオランダにおいて、ユトレヒト大学が中世史研究の拠点であり、レイデン大学が古代史や祖国史、植民史研究の中心であったに反して、彼の学んだフローニンゲン大学では歴史学は未だ独立した学科を構成せず、文学部ネーデルラント科においてゲルマン系言語と外国史および祖国史が並列して講義されるというありさまでした。この時期、大学の歴史学の講義に満たされないホイジンガの心を強くひきつけたのはスイスの文化史家ブルクハルトでした。彼は生涯、ブルクハルトを師として尊敬しましたが、文化史家ホイジンガの形成はブルクハルトの影響なしには考えることができません。いずれにせよ、フローニンゲン大学は十七世紀初頭に成立した古い伝統をもつ大学でしたが、オランダの東北部にあり、文化的にも学問的にもいわば辺境にあつたことが、ホイジンガの伝統にとらわれない自由な学問の形成にとって幸いしたと言えらると思います。

さて主題に入りたいと思いますが、彼が歴史家であり、文明批評家であつたことから、私たちがホイジンガと現代というとき、具体的にはホイジンガと現代歴史学、ホイジンガと現代文化（あるいは現代文明）というふうに問題を

限定して考えてよいと思います。また、現代という言葉が厳密にはどの期間を意味するかについては、人によっていろいろな考え方がありうると思いますが、ここではその問題に深入りせず、さし当っては、第一次世界大戦後あたりから現代と呼びたいと思います。

まず、ホイジンガの現代歴史学の動向に与えた影響は、十九世紀の歴史学が政治史、法制史、経済史などのように客体的な歴史を科学的合理的に捉えようと考えたのに反して、歴史における主体的な要因を強調したことです。つまり、歴史や社会の中で行動する存在としての人間は非合理的なモチベーションによって動かされるのであって、必ずしも論理的な考慮によってのみ動かされるものではないということ、別の言葉で言えば、非合理的な直感や想像に基づいて生き生きした過去のイメージを描くのが歴史家の仕事であるとホイジンガは言うのです。ただし、彼は決して非合理主義的な歴史家ではなく、むしろ彼が心を砕いたのは歴史に作用する非合理的な要素をいかにすれば合理的にとらえることができるかという問題でした。このようにして彼は十九世紀の合理主義、理性主義の良い伝統を批判的に継承しながら、伝統的歴史学の基軸を決定的に移動し、現代の歴史学に大きな影響を与えました。このように考えますと、前に述べたように、彼は内的な関心に従いながら、自己流に、きわめて個性的独創的な歴史学を作り上げたようにみえますけれども、実はホイジンガ史学は十九世紀末から二十世紀へと転換する西ヨーロッパ史学の本流に棹さしており、彼みずからその転換にコミットし、潮の流れの方向に影響を与えたということができます。

つぎに、十九世紀の歴史学が政治、法制、経済などの客体を科学的客観的にとらえるために公文書、証書類を第一級の史料と考え、同時代人の手に成る年代記、文学、メモワール、書簡、芸術作品などを荒唐無稽と考えたのに反して、ホイジンガはこれらの史料こそ過去に生きた人びとの精神のありようやニュアンスを理解する第一級の史料と考えました。彼はこれらの史料を駆使して過去の精神形式を明らかにし、歴史を作る主体としての人間生活のさまざま

な姿を描き出しました。今日、歴史学徒はこうしたジャンルの史料を操作することなしには歴史研究を行えないのであります。最後に、彼はまた宗教学、言語学、文化人類学、心理学などを動員しながら、人間生活の多面的な活動が織りなす歴史の過程を豊かな想像力によって構想しました。ホイジンガのこのような特色は力作『ホモ・ルーデンス』にもっともよく現われております。

かくして彼が求めたのは、結局、複雑にして謎に満ちた人間とその行為を理解し、全的な人間を回復し、復権することにあります。こうした傾向はたとえばフランスの歴史学界などにも平行的にみられる現象で、現代フランス史学界に大きな地位を占めているアナル学派やことにその指導者であった故リユシアン・フェーブル教授などに顕著に現われております。

ホイジンガと現代歴史学とのかかわりはこのくらいにして、つぎにホイジンガと現代文化について考えてみたいと思います。ホイジンガの生きた時代は二度の世界大戦とナチズムを生んだ非合理と狂気が支配した時代であり、他方で技術化と組織化、大衆社会的状況の支配した時代でした。彼はすでに一九一八年と二七年に二冊のアメリカ文明を論じた書物を発表し、ヨーロッパから分かれて特異な発展をしたアメリカ文明を、母なるヨーロッパ文明との比較のもとに考察しました。そしてそこに彼が発見したのは巨大でスピード化した技術と組織、合理主義と能率主義、大衆社会化の進行でした。

世界恐慌の余波の去らない一九三五年、ドイツとイタリアから生じたファシズムの暗雲は彼の祖国オランダにまで広がり、この年の地方選挙で、オランダナチ党は三十万票を獲得しました。他方、ファシズムの脅威と国内右翼勢力の台頭に抗して左翼勢力の結集がみられた当時の状況の中で、共産党も大量の票を獲得しました。左右両勢力の進出を憂慮し、ファシズムに対する痛烈な怒りと批判を意図して、ホイジンガはこの年『明日の影の中で』を書き上げ

ました。彼はこの書で自然科学が思考力の限界にまで達してなお発展をやめず、文化科学との著しい不均衡をひきおこしていること、科学の進歩と教育の普及は期待に反して判断力の衰退や批判意欲を減退させついにはナチスの人種理論や近代戦における大量破壊、大量殺戮をもたらしたことを述べ、これらの点に、ヨーロッパ文明が陥っている病患の重大な徴候をみたのであります。すなわち彼はファシズムをヨーロッパ文明の発展と未来への展望の中でとらえ、それを現代ヨーロッパ文明の生んだ病理現象とみたのです。ヨーロッパ文明の病患に対して彼が下した診断によれば、「十九世紀末以来始った知性を存在に優位させようとする精神の転回」こそ文明の危機を惹起した張本人であります。かくして真理や知識の理想は放棄され、理性よりも意志が選択され、「存在」への意志や「血と土」への意志が志向され、このような傾向を代表する生の哲学はついに国家にはすべてが許されるとして国家を倫理や道徳の彼岸におくナチズムへの道を開いたのであります。伝統的な責任感に代わって安手なヒロイズムが登場して政治宣伝に利用され、ピュアリリズム（小児的心理）と呼ぶべき精神態度が普遍化して遊びとまじめの区別を混乱させる。ホイジンガが現代ヨーロッパの精神状況の全般をこのように診断するとき、彼はかつてアメリカ文明を大衆の支配する文化とみなした視角——いまや方法的にも一層洗練された視角を基礎にしております。この著作はマンハイムやオルテガの著作と並んで第二次大戦後アメリカや日本で盛んに行なわれている大衆社会論の出発点となりました。これらの大衆社会論はエリート主義的性格が強くペシミステイクな色合いを帯びておりますが、ホイジンガの場合にはその思想的先駆者としてブルクハルトの強い影響を無視するわけには参りません。

現代の政治、社会的状況が一九三〇年代に似ていることはしばしば指摘されますが、いずれにせよ、彼が強く批判した一九三〇年代の政治・文化状況としての全体主義、軍国主義、超ナショナリズム、民主主義の墮落などは、戦後弱まったとはいえ、現代文明が依然としてそれらのものの再発を許すような体質を持っていることを誰も否定できな

いでしよう。ホイジンはファシズムが大衆の操作の上に成り立っていることを鋭く見抜いたのですが、そのような大衆社会的状況は現代では加速度的に進行し、技術や産業の巨大化、組織化が極限化して、いまや管理社会の滲透、民主主義の形骸化などの新しい危機を産み出し、他方、産業の高度成長と合理化の徹底が公害や資源の枯渇など人類の未だ経験しないグローバルな危機を産みつつある事情は諸君のよく承知している通りであります。

それではホイジンはこのような文化の危機に対してどのように対処しようとしたのでしようか。彼によれば、文化は第一に精神的価値と物質的価値の均衡を必要とするものであり、第二に文化は理想に向って方向づけられた存在であって、その理想に向っての努力や志向を内包し、その結果として当為の感覚、犠牲と奉仕などの観念を伴うものです。すなわち彼は基本的には十九世紀以降失われた精神的価値と物質的価値の均衡の回復と文化の倫理的性格の復権、存在に対する認識の優位の回復をヨーロッパ文明の新しい担い手である若い知識人に期待するのであります。

しかしながらホイジンがヨーロッパ現代文明の病患の治癒のための処方箋を一層詳しく論じたのは、死を前にして書き上げ、死後出版された『汚された世界』（磯見昭太郎他訳、河出書房）です。いまこの書物の内容を詳しくお話しする余裕はありませんが、簡単に言えば、彼は失われた文化を回復し、精神が文化の担い手になるためには、精神それ自体が浄化される必要があります、そのためには超ナシヨナリズムを駆逐し、国際間の信頼関係がとり戻されなければならぬと考えます。そしてここでもまた彼は国際関係の信頼の回復は倫理的なものに根ざしていると考え、さらに倫理的なものを超えて、恩寵と救済の問題に関連する宗教的理念の必要さえも示唆しております。彼がここで宗教的理念と呼ぶものは必ずしもキリスト教を指しておらず、形而上的なもの、聖なるものを意味しております。そしてこの「聖性」への畏敬によって自己変革が行われなければならないと説き、そのような自己変革のために知恵と節制、禁欲と献身の復権を説いております。

ホイジンガの晩年の重要な著作として、私たちは『ホモ・ルーデンス』を無視することはできません。スイスの歴史家でホイジンガをもっとよく知るW・ケーギがホイジンガの歴史の諸著作を各論とすれば『ホモ・ルーデンス』は総論あるいは方法論的一般仮説と考えられると述べているように、この書物をホイジンガの歴史観・方法論と関連させて論じることは大事なことですが、同時に今まで述べてきたような彼の現代文明批判の有力な武器として考察することも必要です。たとえば彼はナチズムの主張には遊びの要素がまったく欠如していることを指摘しており、また戦争やスポーツにも遊びの要素がなくなってしまうことを歎いております。現代社会においてはスポーツは盛んになればなるほど遊びの精神を失ってまじめ一方になり、まじめが真剣さを通りこしてムキになってしまいます。オリンピックなどのスポーツは国家の威信とコマースリズムに利用され、施設は拡大されるが選手はプロ化して利害の打算に終止するようになります。

それでは遊びとは何かと言いますと、ホイジンガによれば、人間はいずれにおいても外的な拘束や困難を克服するために本気になって生きており、と同時に仮構の世界において、何の役にも立たない欲望のためにゲームを行ない、そのようなゲームで人生を満たしたいという内的衝動に駆られているというのです。そして前者から人間の生活を豊かにする物質的福祉が発達し、後者から人生を美しく価値あるものにする精神文化が育ってくるのであって、かくして「人間の文化は遊びにおいて、遊びとして成立し発展した」というふうにホイジンガは考えるのであります。したがって真の文化はある程度遊びの内容を持たなくてはならず、遊びⅡゲームがルールを守り、自発性Ⅱ自由において成り立つように、文化は何らかの自己抑制と克己を前提とし、遊びを遊ぶ者が自由意志で受け入れたある限界Ⅱルールの中で閉ざされた自己を見つめる能力を前提としていると彼は説きます。そして真の遊びは、現代のプロパガンダが大衆的な反応をまき起こそうとするヒステリックな大騒ぎとは反対のものであり、あらゆる宣伝を締め出すもので

す。要するに、彼によれば遊びは人間文化にとって本質的、根源的条件であり文化の基盤であつて、それが失われることは文化の墮落と崩壊を意味するのであります。

ホイジンガの提起した問題は現代では決して耳新しいとは言えませんが、大衆社会、情報化社会の進行に伴う文化の変質と下降、あるいは公害や遊びと文化との関係などの問題は、現代社会や文化におけるもつともアクチュアルな問題であつて、いわば三十年前の彼の予見と洞察の正しさと深さが立証されたと言えます。また彼の説くストイシズムや簡素化は非現実的な幻想として退けられがちですが、高度経済成長への反省と深刻な公害に行きづまった現代の私たちにとって、無視しえない思想になりつつあるのではないでしようか。

(教授)